

図書館散歩 — 迷い込んだ先に山口文庫が… 石塚 純一(図書館長)

何かを調べようとする時、みなさんは何から始めるだろう？ はじめの一步はインターネットで検索する、関係する本を手にしたと思ったら、図書館のOPACでやはり検索し、棚から取り出さず貸出カウンターに向かう人が多いのではないだろうか。

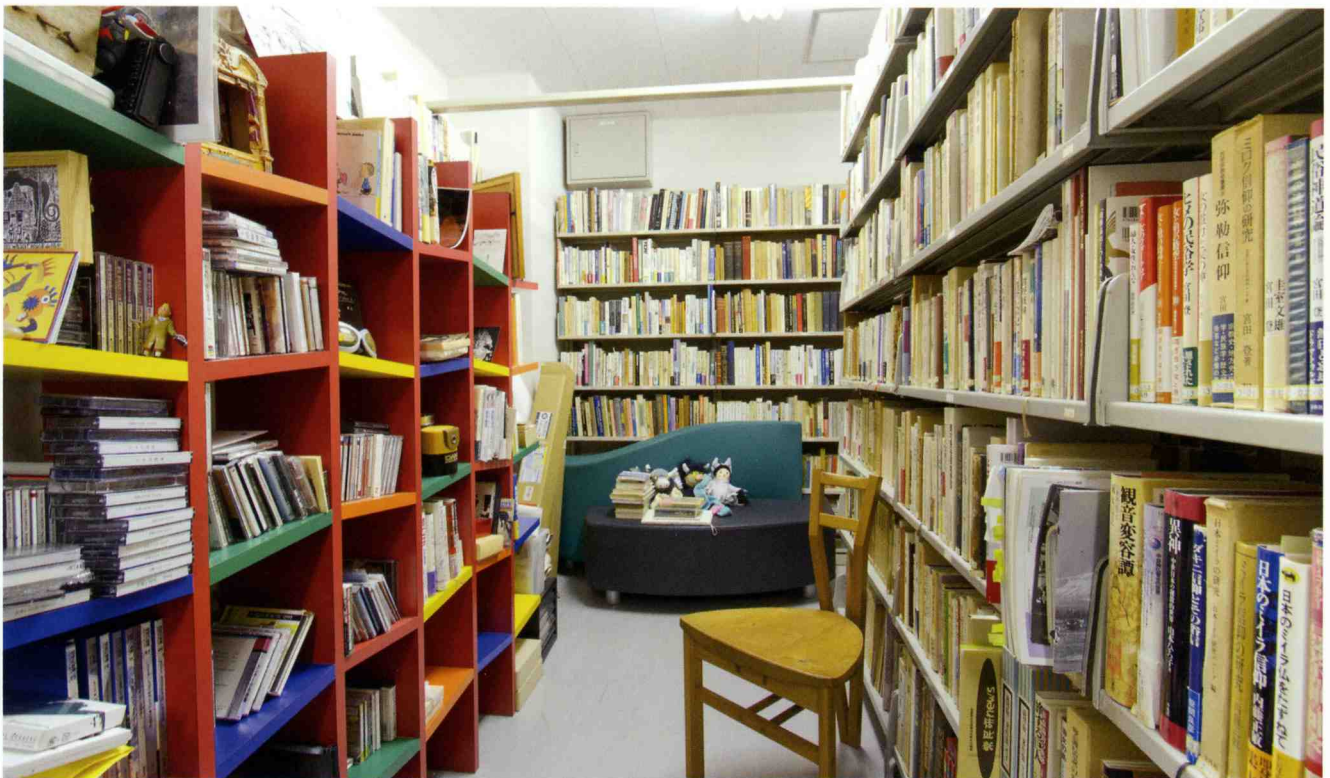
でもちょっと立ち止まってみよう。目的の本が見つかったら、ついでにちょっと周囲にある本を眺めてほしい。関連のありそうな意外な本のタイトルが少し先にひっそりと隠れているかもしれない。書棚の間を歩く。図書館の最大の愉しみの一つだ。デジタル検索では味わえない身体感覚、本との交感が自身に異変をもたらす。

2階閲覧室から書庫へ

「図書館を見れば、その大学がおおよそわかる」と言われる。各地の図書館を歩いてきたが、札幌大学の図書館は実に気持ちのいい空間だ。緑の庭に囲まれ、壁が少なく水平に広がる風通しの良い空間、書棚と書棚の間隔もちょうど良い。その間隔があと5センチ狭かったらぐっと圧迫感が強まる。南側の閲覧室、大きなテーブルの上には複数の本を思い切り広げることができる。大型の美術本を外光の下で見ることができるのはぜいたくな時間だ。北側の閲覧コーナーは、隣を気にせず集中してひたすら読むときにもってこいだ。

AVコーナーの南側に位置する、参考図書=レファレンスブックを収めた場所は、インターネット事典の「ウィキペディア」などに押されて、縁遠くなった空間かもしれない。あらゆる種類の事典、外国語辞書が並んでいる。根気よく通って、一度事典を引く楽しみを覚えたら、大学4年間に課題として出されるレポートなど、ここだけでおおよそ片付くというものだ。重い事典を棚からひっぱり出して開き、目的の用語に向かって関連しそうな語を手掛かりにページをめくり、読み、コピー機に運び、あるいは筆写し、また元の棚に戻す…。こういう一連の身体の動きが頭脳にあたえる刺激は、測定され得ない性質のものだが、人の知の蓄積になくはならないしぐさである。

貸出カウンターの横から2階の書庫に入って見よう。入口は小さいが足を踏み入れれば高い天井、本の山並みが続いている。書棚の間を歩く。図書館は、一冊の本に一つの記号を与えて十進分類法によって均等に配架され、すべての本が平等に扱われる。しかしだからといって、図書館が均質な空間かと問われれば、そうではないとわたしは答える。その時々のある関心を抱きながら書棚を歩けば、問題の書物群に近づくにつれて身体が反応するからだ。棚の本が目配せしてくるような感覚を味わったことがあるのは私だけではないだろう。



山口文庫